

# 平若C遺跡

—3次調査—

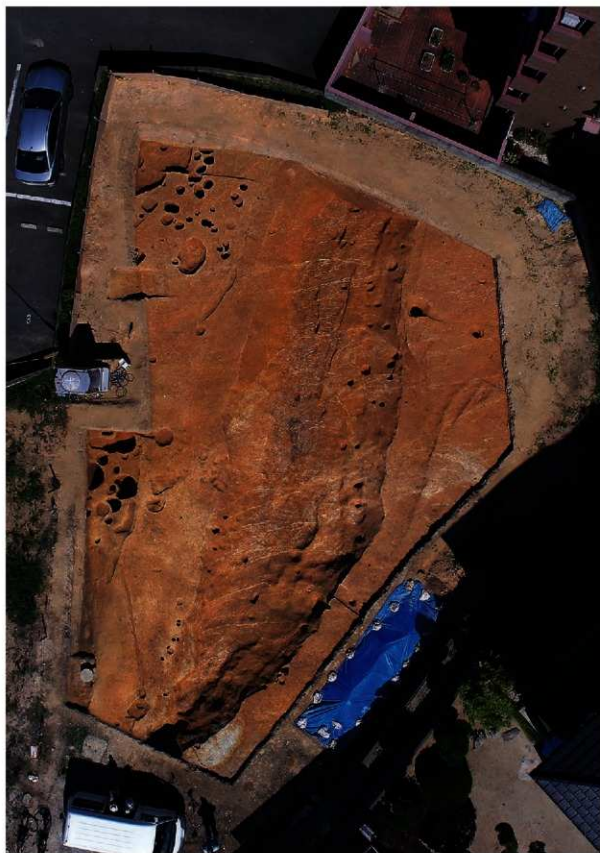
福岡県春日市弥生所在遺跡の調査

春日市文化財調査報告書 第86集

2021

春日市教育委員会





調査区全景 ※合成写真



## 序

福岡市の南に接する春日市は、福岡市の中央部まで10km圏内と地理的条件に恵まれて、住宅都市として栄えてきました。現在、14.15km<sup>2</sup>のコンパクトな市域に、11万3千人を超える市民の方が生活をされています。

かつて春日市を含む福岡平野一帯は、中国の史書に記された奴国であったことは、ほぼ定説になっています。特に『後漢書』倭伝に記される西暦57年に後漢の光武帝から奴国王が下賜された印綬は、江戸時代に志賀島で発見された漢倭奴国王の金印であるとされています。このように奴国は弥生時代の有力な国の1つでした。

発掘調査でも、福岡平野には大小様々な遺跡が確認されており、歴史を塗り替えるような新たな発見があることがあります。特に、本市の中央部に位置する春日丘陵周辺には、南北2km、東西1kmの範囲に渡り弥生時代の遺跡が稠密する奴国最大級の遺跡、須玖遺跡群があります。

須玖遺跡群は大きさだけでなく、奴国の王や王族の墓地、当時の最先端技術である青銅器、鉄器、ガラス製品の生産工房が確認されており、その質や量は他の遺跡を圧倒しています。これらのことから須玖遺跡群は奴国の王都と称されています。

ここに報告いたします平若C遺跡3次調査は、須玖遺跡群の中央部に所在する遺跡です。北に接する1・2次調査では弥生時代などの竪穴建物跡が確認され、それを囲む大溝も確認されていました。3次調査でも大溝が確認され、先述の大溝に続くと考えられます。

本書が歴史研究、地域研究の資料として末永く利用され、市民の方にも広く活用していただければ幸いです。

なお、発掘作業や整理作業において、御指導、御協力を賜りました多くの方々には御礼申し上げます。

令和3年3月31日

春日市教育委員会

教育長 扇 弘 行

## 例言

1. 本書は2019年4月15日から同年7月4日にかけて春日市教育委員会が実施した住宅建築に伴う平若C遺跡3次調査の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、井上義也、熊埜御堂早和子が担当し、報告書作成は井上が担当した。
3. 遺構の実測は、井上、熊埜御堂、野村俊之が行い、製図は稲永美紀、吉村美保が行った。
4. 遺物の図面作成は、井上、織田優子、片多浩美、竹田祐子、吉富千春、製図は織田、片多、竹田、吉富が行った。
5. 掲載写真のうち、遺構については井上、(有)空中写真企画が撮影し、遺物は(有)タクト・西村新二氏が担当した。
6. 本書の遺構実測図に用いた方位は座標北である。
7. 本書の執筆および編集は、下田詩織の協力の下、井上が行った。

## 本文目次

I	はじめに	1
1	調査にいたる経過	1
2	調査の組織	1
II	位置と環境	2
III	調査の内容	5
1	調査の概要	5
2	遺構	5
(1)	竪穴建物跡	5
(2)	土坑	8
(3)	ピット	8
(4)	溝	11
3	遺物	13
(1)	土器	13
(2)	鉄器・鉄滓	15
(3)	石器	19
(4)	瓦	21
IV	まとめ	22

## 図版目次

巻頭図版	調査区全景
図版1 (1)	調査区東半
(2)	調査区西半
図版2 (1)	1号竪穴建物跡
(2)	1号竪穴建物跡(南西から)
(3)	1号竪穴建物跡P5土層(北東から)
図版3 (1)	1～3号土坑
(2)	1号土坑断面土層(南東から)
(3)	2号土坑土層(北東から)
(4)	3号土坑土層(南東から)
(5)	P3土器出土状況(北から)

図版 4	(1)	1号溝A-A' 断面土層 (南東から)
	(2)	1号溝B-B' 断面土層 (南東から)
図版 5	(1)	1号溝C-C' 断面土層 (北西から)
	(2)	1号溝鉄器1 出土状況 (東から)
	(3)	5号溝D-D' 断面土層 (南西から)
図版 6		土器①
図版 7		土器②
図版 8	(1)	鉄器等
	(2)	石器①
図版 9	(1)	石器②
	(2)	瓦

## 挿 図 目 次

第1図	平若C遺跡周辺遺跡分布図	3
第2図	平若C遺跡位置図	4
第3図	平若C遺跡3次調査遺構配置図	6
第4図	1号竪穴建物跡実測図	7
第5図	1・2号土坑実測図	9
第6図	3・4号土坑実測図	10
第7図	1・5号溝土層実測図	12
第8図	1号竪穴建物跡・2号土坑・ピット出土土器実測図	13
第9図	1号溝出土土器実測図①	15
第10図	1号溝出土土器実測図②	16
第11図	鉄器等実測図	19
第12図	石器実測図①	20
第13図	石器実測図②	21
第14図	瓦実測図	21
第15図	平若C遺跡1・2・3次調査遺構配置図	24

## 表 目 次

表 1	出土土器観察表	17
表 2	出土石器観察表	22



# I はじめに

## 1 調査に至る経過

平成 29 年 12 月 21 日に、春日市弥生 3 丁目 70 番において個人住宅の分譲を目的とする事前調査の依頼書が提出された。当地は、周知の埋蔵文化財包蔵地である平若 C 遺跡に含まれ、北側の 1・2 次調査では、弥生時代、古墳時代を中心とする竪穴建物跡などが確認されていた。

平成 30 年 1 月 11 日、地形を配慮して重機による 3 本の試掘溝を設置したところ、地表下 20～30 cm で花崗岩風化土壌である明黄褐色土の地山を検出し、遺構を確認した。同年 3 月に開発に係る申請が出され、宅地造成や建物の基礎が遺構への影響を及ぼすため、対象地 486.10 m<sup>2</sup>のうちの 353 m<sup>2</sup>を発掘調査することとなった。発掘調査は、地権者の負担において平成 31 年 4 月 15 日から令和元年 7 月 4 日まで行った。

## 2 調査の組織

発掘作業および整理作業における調査体制は次のとおりである。

発掘調査（令和元年度）		報告書作成（令和 2 年度）	
教育長	山本 直俊	教育長	扇 弘行
教育部長	神田 芳樹	教育部長	神田 芳樹
文化財課長	神崎 由美	文化財課長	高田 勘治
整備活用担当		整備活用担当	
統括係長	高田 博之	統括係長	高田 博之
主 査	森井 千賀子	主 査	森井 千賀子
主 査	大原 佳瑞重	主 査	大原 佳瑞重（～6 月）
主 査	飛永 宗俊	主 査	飛永 宗俊
囑 託	坂井 和彦	主 任	塚元 雅代（7 月～）
囑 託	和田 奈緒	会計年度任用職員	和田 奈緒
調査保存担当		会計年度任用職員	西尾 純司
課長補佐	中村 昇平	調査保存担当	
主 査	吉田 佳広	課長補佐	中村 昇平
主 査	井上 義也	主 査	吉田 佳広
主 任	山崎 悠郁子	主 査	井上 義也
主 事	熊塾御堂 早和子	主 任	山崎 悠郁子
囑 託	川村 博	主 事	熊塾御堂 早和子
囑 託	種生 優美	会計年度任用職員	川村 博
囑 託	尾方 禎莉	会計年度任用職員	種生 優美
		会計年度任用職員	下田 詩織
		会計年度任用職員	田中 健

## II 位置と環境

平若C遺跡は、福岡県春日市弥生3丁目70番外に所在する。

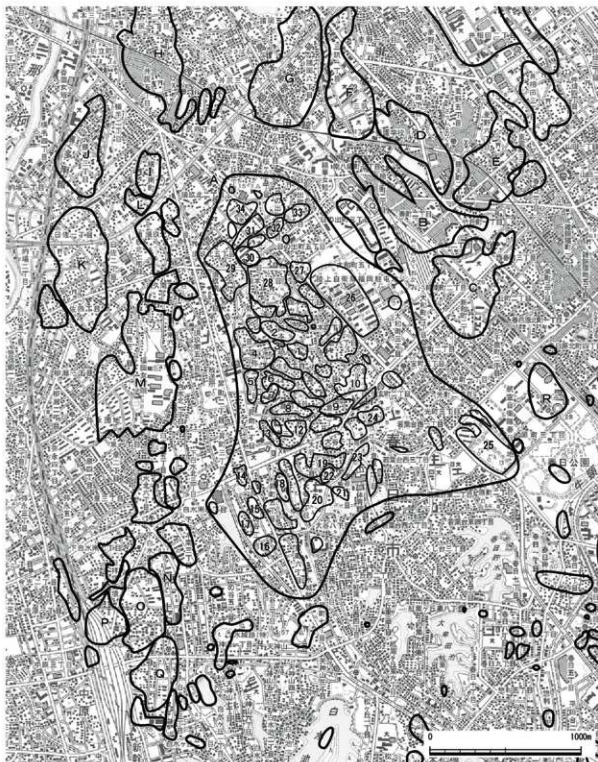
玄界灘に面した福岡平野は東に御笠川、中央に那珂川が北流する沖積平野であり、東を三郡山地、南と西を脊振山地に囲まれている。当平野の南東には、脊振山系の牛頭山から派生した春日丘陵が市の中央を南北に延びており、北半部とその周辺の低地には須玖遺跡群が広がる。当遺跡は須玖遺跡群の中央、春日丘陵の小丘陵上に位置する。過去の調査では、弥生時代中～後期の集落跡や青銅器工房跡、中国式銅剣鐔が発見された。

当平野は朝鮮半島に近いことから、古来より大陸との交流拠点として発展し、水稲耕作や青銅器生産など、当時の最先端技術がいち早くもたらされた地域であった。弥生時代初期には、那珂川と御笠川にはさまれた平野中央の台地上の板付遺跡や那珂遺跡群などで環濠集落が形成され、平野縁辺部の丘陵上にも前期墳墓群や小規模な集落跡が多数分布しており、後漢書に記された「奴国」形成の兆しをみることができる。一方、春日市内の弥生時代前期の遺跡は少なく、伯玄社遺跡、一の谷C遺跡、平若A遺跡などが点在する。

弥生時代中期以降になると、比恵遺跡群や那珂遺跡群などの大規模な集落が平野の広範囲に分布するようになる。春日市内でも須玖遺跡群を中心に住居跡や墳墓の数が急激に増加している。100軒以上の竪穴住居跡が検出された大谷遺跡や大南A遺跡、450基以上の甕棺墓が確認された豆塚山遺跡などが分布する。須玖遺跡群は、後漢書に記された奴国の王都と考えられており、当遺跡群内の須玖岡本遺跡岡本地区では明治32年に、30面前後の前漢鏡、10本の武器形青銅器など多数の副葬品を伴う王墓とみられる甕棺墓が発見されたのをはじめ、同遺跡内に王族墓と推定される墳丘墓が確認されている。

中期末以降になると、春日丘陵北部周辺には青銅器工房が集中して建てられた。奴国の官営工房とも称される須玖岡本遺跡坂本地区をはじめとした須玖永田A遺跡などの青銅器工房跡からは鋳型や送風管、埴埴などの青銅器鑄造関連遺物が多数出土している。また、ガラス工房跡と考えられている須玖五反田遺跡からはガラス勾玉鋳型や未製品などの遺物も出土している。さらに、鉄器工房跡も須玖遺跡群の赤井手遺跡と仁手A遺跡で確認されており、弥生時代中～後期の福岡平野は、金属器・ガラス器生産が集中する特別な地域であった。

古墳時代になると、春日市内では日押塚古墳、竹ヶ本古墳、下白水大塚古墳などが春日丘陵西側の段丘に築造されたが、奴国の中枢であった須玖遺跡群は急激に縮小している。那珂遺跡群が所在する台地の中央部に初期の前方後円墳である那珂八幡古墳が築造されており、その周辺には弥生時代から継続した古墳時代の大規模な集落があった。このことから、福岡平野の中枢は須玖遺跡群から、中央部の比恵・那珂遺跡群へと移っていったと考えられる。



- |           |             |            |           |             |            |            |            |
|-----------|-------------|------------|-----------|-------------|------------|------------|------------|
| 1 平若C遺跡   | 2 平若A遺跡     | 3 平若B遺跡    | 4 赤井手遺跡   | 5 竹ヶ本A遺跡    | 6 竹ヶ本B遺跡   | 7 竹ヶ本C遺跡   | 8 西方遺跡     |
| 9 仁王手A遺跡  | 10 仁王手B遺跡   | 11 船玄辻遺跡   | 12 大南B遺跡  | 13 足塚山遺跡    | 14 室の下遺跡   | 15 一の谷A遺跡  | 16 一の谷B遺跡  |
| 17 一の谷C遺跡 | 18 トビヤ遺跡    | 19 大南A遺跡   | 20 大谷遺跡   | 21 高辻A～C遺跡  | 22 高辻B遺跡   | 23 高辻D・F遺跡 | 24 松原遺跡    |
| 25 北石遺跡   | 26 上平田・天田遺跡 | 27 堀伏尾若尾遺跡 | 28 堀伏岡本遺跡 | 29 堀伏テラウケ遺跡 | 30 堀伏坂本B遺跡 | 31 堀伏五反田遺跡 | 32 堀伏大田A遺跡 |
| 33 堀伏長田遺跡 | 34 堀伏池原遺跡   | A 堀伏池原群    | B 堀八幡遺跡   | C 堀跡遺跡      | D 実野B遺跡    | E 実野C遺跡    | F 三旗遺跡     |
| G 飯塚遺跡    | H 井沢B遺跡     | I 寺島遺跡     | J 橋手遺跡    | K 白土遺跡      | L 笠伏遺跡     | M 赤木原遺跡    | N 寺田・長崎遺跡  |
| O 中山水遺跡   | P 門田遺跡      | Q 天神/本遺跡   | R 額河A遺跡   |             |            |            |            |

第1図 平若C遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)



第2図 平若C遺跡位置図 (1/2,500)

### Ⅲ 調査の内容

#### 1 調査の概要

平若C遺跡は、奴国の王都とされる須玖遺跡群の中央部にある南北110 m、東西140 m程度の遺跡である。過去に行われた1・2次調査では弥生時代～古墳時代を中心とする集落が確認された。特に弥生時代には、青銅器生産工房と推測される屋外溝を付設したり、平面形が「D字」を呈したりする竪穴建物が調査されており、丘陵部の青銅器生産遺跡であることが明らかになった。

3次調査地は1・2次調査地の南側にあり、重機で表土などを30cm程度除去すると明黄褐色土を基本とする地山を検出し、黒褐色土で埋まった遺構を検出した。調査区を縦断する大溝が検出されたため、土置場の都合、対象地を東西に分けて調査した。

発掘調査の結果、竪穴建物跡1軒、土坑4基、大小のピット、溝6条を確認した。殆どの遺構は弥生時代に帰属すると考えられる。竪穴建物跡は調査区南中央部で検出した。残存状態が悪く、壁は北側しか確認していないため竪穴状遺構とした方が良いかもしれない。1～3号土坑は調査区西隅で検出した。2・3号土坑は攪乱により破壊されている。4号土坑は大型のピットにスロープが付く形態をする。周囲に同様な遺構がないことから掘立柱建物の柱穴とは考えられず、立柱遺構と考えられる。ピットからは、弥生土器の他に土師器など歴史時代の土器も出土した。1号溝は南東部から北西部へ広がる大溝である。上層から須恵器や瓦が出土するが、下層の遺物から弥生時代に掘削されたことが分かる。北側の集落に関連する大溝であろう。2～6号溝は1号溝に付随する溝と考えられる。

#### 2 遺構

##### (1) 竪穴建物跡

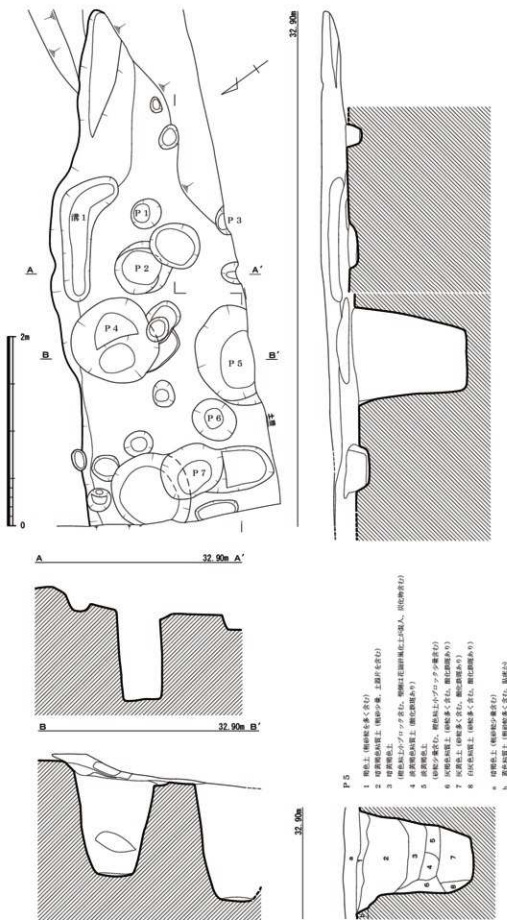
###### 1号竪穴建物跡(図版2-(1)～(3)、第4図)

調査区南中央部で5.4×2.0 m程度を検出した。調査区際であることや攪乱のため全体像はつかめず、壁面は北東側のみを確認できた。南西側は調査区外になるが、地形的に下がるため壁面を有したかは不明で、竪穴状遺構とすべきかもしれない。床面には大小のピットが確認でき、大型のピットは深さが1 mを超えるため主柱穴になる可能性がある。ただし、複数が集中することから建て直しや時期差も考えられる。壁面下には、平面形が「L」字状の小溝がある。

出土遺物は、弥生土器、石剣がある。



第3圖 平若C遺跡3次調査遺構配置圖 (1/100)



第4図 1号竖穴建物跡実測図 (1/40)

## (2) 土坑

### 1号土坑 (図版3-(1)~(2)、第5図)

1号土坑は、調査区西部で検出した。平面形は1.36×0.98 m程度の楕円形で、床面は南部で段をなす。最深部の深さは約39 cm。

出土遺物は、弥生土器が出土するが、図示できる遺物はない。

### 2号土坑 (図版3-(1)・(3)、第5図)

2号土坑は、調査区西隅部で南北1.3 m、東西1.1 m程度を検出した。南側は調査区外、北西側は攪乱により破壊されるため全体像は不明だが、下端の平面形から西側に延びると考えられる。現状で深さは68 cm程度に復元できる。調査区南壁の土層観察では大小2つのピットに切られる。なお、10・11層は包含層か別遺構の覆土であろう。

出土遺物は、弥生土器などが出土した。

### 3号土坑 (図版3-(1)・(4)、第6図)

3号土坑も、調査区西隅部にあり、南北1.25 m、東西0.9 m程度を検出した。床面には42×36 cm、深さ7 cm程度の浅い楕円形のピットがある。上面を削られるが、調査区西壁の土層より52 cm程度の深さであったことが分かる。なお、南側の立ち上がりは5・7層と10・11層の境と考えた。10・11層は2号土坑の10・11層と同一で、3号土坑が掘り込む。このため、10・11層は包含層ないし別遺構の覆土と考えられる。

弥生土器が出土するが、図化できる遺物はない。

### 4号土坑 (第6図)

4号土坑は調査区北部で検出した。直径65 cm程度の大型のピットの両端に舌状のスロープを有するもの。ピット部は深さ75 cm程度で、段掘り。両端のスロープ部は、地形が高い北東方向側が0.66 mと長く、南西側は0.33 mと短い。形状から考えて柱を立てたと考えられるが、少しずつ掘削を行ったものの柱痕は検出できなかった。周辺に同様の遺構がないため掘立柱建物の柱穴とは考えられず、立柱遺構の可能性を考えたい。

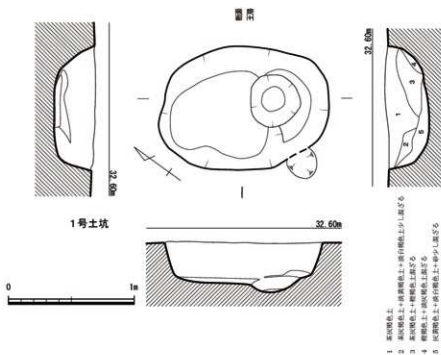
図化できる遺物はない。

## (3) ピット

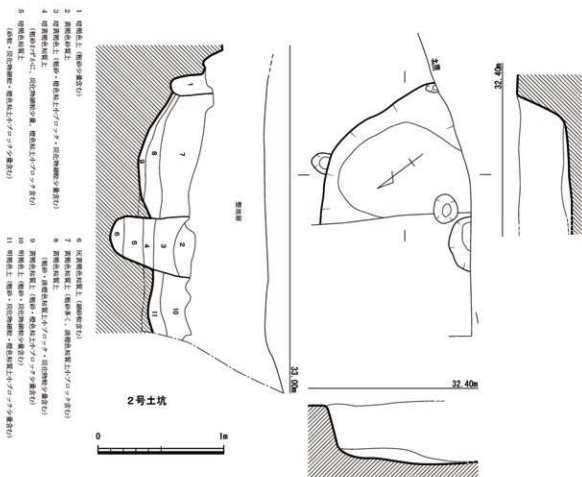
調査区の西部を中心に大小のピットを検出した。地形の高かった北側は造成時に削平を受けるため、深いピットしか残っていないと考えられる。

なお、1号溝の掘削時に、部分的に黒褐色土塊が認められたが、1号溝を切り込むピットの可能性がある。



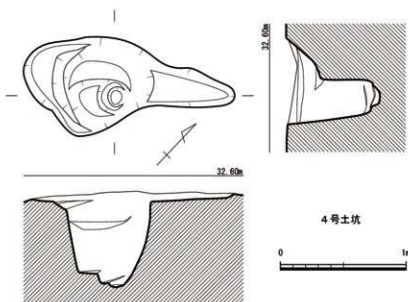
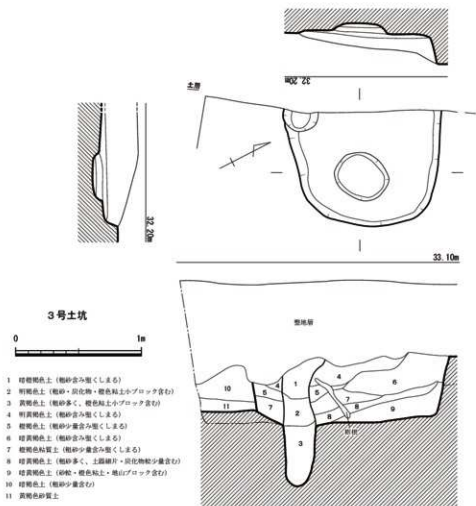


- 1 灰白色土
- 2 灰白色土+浅褐色土+灰白细砂土+少量石
- 3 灰白色土+粉褐色土
- 4 粉褐色土+灰白细砂土
- 5 灰褐色土+粉白细砂土+粉土+少量石



- 1 粉褐色土 (1号土坑)
- 2 灰褐色土
- 3 灰褐色土+粉褐色土+少量石
- 4 粉褐色土
- 5 粉褐色土
- 6 灰褐色土
- 7 灰褐色土+粉褐色土+少量石
- 8 灰褐色土
- 9 灰褐色土+粉褐色土+少量石
- 10 粉褐色土
- 11 粉褐色土

第5图 1·2号土坑实测图 (1/30)



第6図 3・4号土坑実測図 (1/30)

#### (4) 溝

##### 1号溝 (図版4-(1)～図版5-(2)、第7図)

1号溝は、調査区の中央にあり、南東から北西方向へ21.2m程度を検出した。幅は南東隅が1.4mと最も狭く、断面形は「V」字を呈する。ここから北西方向に10m地点まで徐々に広がり、幅6m前後、断面形は逆台形になる。深さは1.2m前後。3次調査では、当溝の北東側に建物跡は確認していないが、1・2次調査の結果から北東側に竪穴建物跡があることは明らかである。このことから当大溝の性格は所謂環壕で、集落の外側を走る溝と考えられる。ただし、須玖遺跡群の他の大溝と同様に丘陵部を鉢巻き上に一周するかどうかは分からない。また、旧地形や溝の形状から考えれば、調査区南東側から当溝が掘削されるか、陸橋の存在が考えられる。

中・下層からは弥生土器や鉄器、石器が出土する。上層からも弥生時代の遺物が出土するが、須恵器、瓦、鉄滓が出土するため、当溝が埋まりきるのは歴史時代の可能性がある。

##### 2号溝

2号溝は、調査区南部で長さ2.6m程度を検出した。幅は0.3m前後だが、1号溝との接続部は0.98mに広がる。深さは、西部は2cm以下と非常に浅く、1号溝の接続部も10cm程度である。

図化できる遺物はない。

##### 3号溝

3号溝は、調査区北部で長さ6.8mを検出した。1号溝と平行し、4号溝よりも新しい。幅は、広い部分で0.9m前後、狭い北部は0.3m以下である。深さは10cm以下で浅い。

図化できる遺物はない。

##### 4号溝

4号溝は、調査区北部にあり、3号溝に切られ1号溝に接続する。規模は長さ0.85m程度、幅0.7m前後、深さ5cm前後である。

図化できる遺物はない。

##### 5号溝 (図版5-(3)、第7図)

5号溝は、調査区西部で長さ2.45mを検出した。幅0.35m前後、深さは10cm以下で浅い。削平前は北西側に延び、1号溝と接続する可能性がある。

図化できる遺物はない。

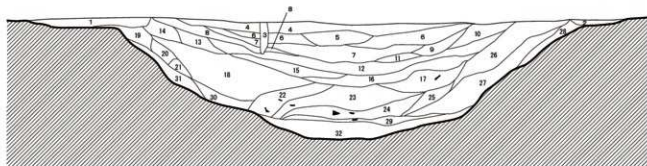
##### 6号溝

6号溝は、調査区北東部で1.2m程度を検出した。南西部は1号溝と接続し、北東部は調査区外まで延びる。幅は0.5～0.6m、深さは10cm前後である。

図化できる遺物はない。

1号溝

32.60m A'

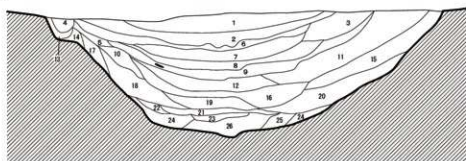


- |                        |                     |                        |                         |
|------------------------|---------------------|------------------------|-------------------------|
| 1 明褐色粘質土 (粘砂少量含む)      | 10 褐色土 (粘砂少量含む)     | 19 明褐色土 (粘砂少量含む)       | 28 明褐色土 (粘砂多く含む風化層か?)   |
| 2 明褐色粘質土 (粘砂少量含む)      | 11 褐色粘質土 (粘砂少量含む)   | 20 白黄色土 (粘砂少量含む)       | 29 灰黄色粘土 (粘砂少量含み少し硬い)   |
| 3 褐色土 (粘砂少量含む)         | 12 黄褐色土 (粘砂含む)      | 21 淡褐色土 (粘砂含む)         | 30 明黄色粘土質 (粘砂多く含む)      |
| 4 明褐色土 (粘砂含む)          | 13 暗褐色土 (粘砂含む)      | 22 黄褐色粘質土 (砂粒・土層片を含む)  | 31 白黄色粘土質 (粘砂多く含む風化層か?) |
| 5 褐色土+淡黄褐色土 (堆山ブロック含む) | 14 明黄褐色土 (粘砂含む)     | 23 明褐色土 (粘砂多く含む)       | 32 灰白色-暗褐色土 (粘砂多く含む)    |
| 6 暗褐色粘質土 (粘砂少量含む)      | 15 灰黄褐色粘質土 (粘砂少量含む) | 24 明灰黄色粘質土 (砂粒・土層片を含む) |                         |
| 7 暗褐色粘質土 (粘砂少量含む)      | 16 灰黄色粘質土 (粘砂多く含む)  | 25 灰黄褐色粘質土 (粘砂多く含む)    |                         |
| 8 褐色粘質土 (粘砂少量含む)       | 17 淡黄褐色粘質土 (粘砂多く含む) | 26 黄褐色土 (粘砂多く含む)       |                         |
| 9 暗褐色土 (粘砂少量含む)        | 18 黄褐色土 (粘砂含む)      | 27 黄褐色土 (粘砂多く含む層あり?)   |                         |

B

33.00m B'

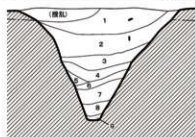
1号溝



- |                     |                   |                        |
|---------------------|-------------------|------------------------|
| 1 淡灰黄色土             | 10 淡褐色粘質土         | 19 淡灰黄色土+灰黄色土 (粘砂少し含む) |
| 2 暗灰黄色土             | 11 淡灰粘質土+灰黄色土     | 20 灰黄色土+灰黄色土           |
| 3 明灰黄色土             | 12 淡灰粘質土          | 21 淡褐色土                |
| 4 明灰黄色土+灰黄色土        | 13 灰黄色土+淡灰黄色土     | 22 淡褐色粘質土+淡黄色土         |
| 5 暗褐色土+黄褐色土         | 14 明灰黄色土          | 23 灰黄色土                |
| 6 明灰黄色土             | 15 明灰黄色土          | 24 淡褐色土+灰黄色粘質土         |
| 7 明灰黄色土             | 16 淡灰黄色土 (粘砂少し含む) | 25 淡褐色土+灰黄色土           |
| 8 灰黄色土              | 17 淡灰黄色土+灰黄色土     | 26 明灰黄色土+灰黄色粘質土 (粘砂含む) |
| 9 淡灰黄色土+灰黄色土 (土層含む) | 18 淡灰粘質土          |                        |

1号溝

33.00m C'



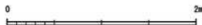
- |             |
|-------------|
| 1 淡灰黄色土     |
| 2 淡白灰黄色土    |
| 3 灰黄色土      |
| 4 灰黄色土+淡褐色土 |
| 5 暗褐色土+黄褐色土 |
| 6 淡灰黄色土     |
| 7 灰黄色土      |
| 8 灰黄色土+暗褐色土 |
| 9 暗褐色土      |

5号溝

32.70m D'



- |               |
|---------------|
| 1 淡灰黄色土       |
| 2 淡灰黄色土+淡白黄色土 |



第7図 1・5号溝土層実測図 (1/40)

### 3 遺物

#### (1) 土器 (図版6～7、第8～10図)

##### 1号竪穴建物跡出土土器 (1～5)

1～5は弥生土器で、風化のために器面の剥落が著しい。1・2は甕の口縁部。1は口縁部の上面がやや内傾する資料。2は上面が匙面状を呈し内傾し、口縁下には三角突帯を付す。3は底部。上部の開きから考えれば、壺の可能性はある。4は開き具合が少ない感があるが、蓋の可能性を考えた。5は器台の口縁部。器壁が厚い。

##### 2号土坑出土土器 (6)

6は弥生土器で、樽形を呈する壺とした方が良いかもしれないが、丸みを持つ甕と考えた。口縁下には三角突帯を付す。

##### P1出土土器 (7)

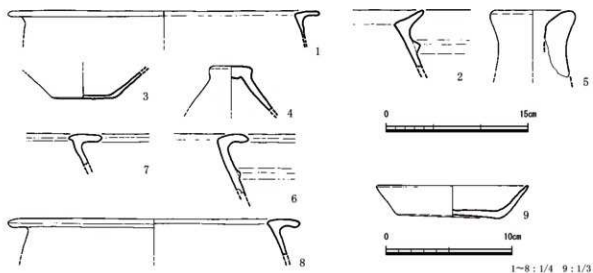
7は弥生土器の甕の口縁部で、内側を突出させる資料。

##### P2出土土器 (8)

8は弥生土器の甕の口縁部で、口径は31.0cmに復元できた。内側はやや尖らせ、上面は外側に僅かに下がる。

##### P3出土土器 (9)

9は土師器の甕身。風化が著しく、調整は殆どわからないが、底部は回転系切りと分かる。口径12.0cm、器高2.5cm、底径8.1cm。



第8図 1号竪穴建物跡・2号土坑・ピット出土土器実測図 (1/3・1/4)

## 1号溝出土土器 (10～58)

風化による器面の摩滅が著しい。10～16は弥生土器の壺の口縁部。10は複合口縁壺の口縁部で直下には、体部が接続すると考えられる。内口縁は尖り、外口縁には稜を持つ。11はやや大ぶりの壺。内口縁部は比較的長く突出し、丸く仕上げる。外口縁はやや尖り気味。12・13は、内口縁が突出する資料で、13の外口縁の突出度は低い。14は内口縁を僅かに尖らせるもの。15は内口縁が突出し、上面が外傾する資料。外口縁端部はやや尖る。16はやや大ぶりの口縁部。内口縁がやや突出し、外口縁は短い印象を受ける。口縁部はやや肉厚である。

17は口縁部を除き完形の小さな壺。風化が著しく、焼きも悪い。このため底部があるのか丸底なのかは判断できなかった。指頭痕が良く残り、接合痕もあるため、手捏ね土器のようにも見える。土師器であろうか。

18～35は甕の口縁部。18は口縁部が外湾し、口縁下に三角突帯を付す資料。19は口縁部の上面が内傾するもので、内側は突出する。20～22は上面が外傾するもの。20の内口縁の突出度は高い。21は赤色顔料が残存し、直下には口唇状の突帯が巡る可能性がある。23～28は上面がほぼ水平な口縁部。23は内口縁を尖らせ、外口縁はやや突出する。24は外口縁をやや肥厚させ、丸く仕上げる資料。25は断面形が三角形に近いもの。内口縁を突出させたためか、上面がやや窪む。26は内外の口縁端部を突出させる資料。27・28は内側を殆ど突出させないもの。29・30は口縁部上面が内傾する資料で、30は細身の印象を受ける。31～35は中～大型の甕。31の口縁部は立ち、内面は僅かに匙面状を呈する。頸部には三角突帯を付す。32・33は丸みを持つ甕。内外の口縁部を突出させ、上面は、32は僅かに外傾し、33は水平。34は内口縁の突出度が高い資料。35は内外面を断面三角形に突出させる。

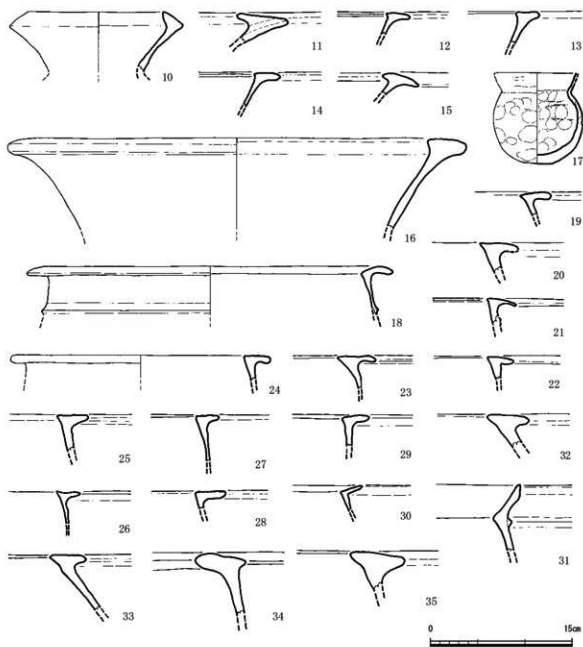
36～52は弥生土器の底部。36～46は上底の資料で、36～38は上部の開き具合から考えて壺であろう。45・46の器壁は厚い。47は底面が歪な資料。48・49は底径が小さな資料で不安定感がある。壺の可能性があらう。50～52は凸レンズ状の底部で、52の器壁は厚い。

53は高環の口縁部。復元口径34.0cm、屈曲部から長く直線的に延びるため、弥生時代終末期以降のものであろう。

54・55は弥生土器の鉢で、完形に復元できた。54は2.8cmの小さな底部から体部が内湾し口縁部にいたるもので、口縁端部は内傾する。55は上底の底部から体部が内湾し、口縁部へいたる資料。口縁部上面の傾きは水平だが、中央は窪む。内面に工具による調整痕が残る。

56は鉢形のミニチュア土器。内面には指頭痕が見られる。

57・58は須恵器。57は壺で口頸部と体部を図上復元した。口縁端部は上方にやや突出し、外面直下には三角突帯を付す。頸部には波状文を施す。肩部が張り、体部の調整は、外面は平行タキ目、内面は僅かに当て具痕が残るがナデ。口縁部の内外面から肩部には自然軸が付く。58は椀で、図上復元した。外面は、口縁下1.35cmに1条の沈線、0.6cm間隔を空けて2条の沈線が巡る。その下はカキ目調整で、底部は回転ヘラ削りを施す。



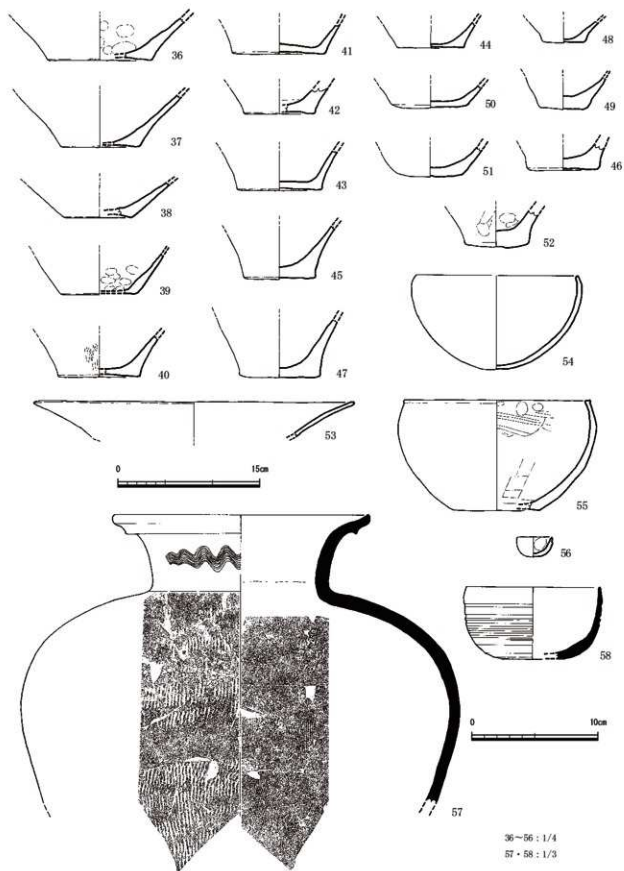
第9図 1号溝出土土器実測図① (1/4)

(2) 鉄器・鉄滓 (図版8、第11図)

鉄器2点と鉄滓4点は、全て1号溝の出土品である。

1は鑄造鉄斧側面の再加工作品で、Ⅲ区下層から出土した。2条の突帯が確認でき、合わせ目も残存する。下方には刃部が作り出されたと推測できるが、欠損する。最大長8.95cm、最大幅3.4cm、厚み1.0cm、重さ30.8g。2は鑄造鉄斧の破片で、Ⅱ区下層から出土した。最大長3.0cm、最大幅2.25cm (錆を含まない)、厚み0.8cm、重さ8.3g。

3～6は鉄滓。すべてⅠ区上層から出土した。3は全面に大小の気孔が目立つ。最大長2.2cm、最



第10图 1号溝出土土器実測図② (1/3・1/4)

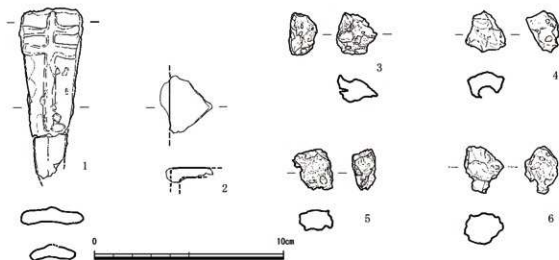


表1 出土土器観察表

( )は復元数

番号	所属 図版	種類	出土位置	測量 ①口径②器高 ③口径	存在 状態	観察及び特徴	備考
1	第8図 図版6	甕	1号竈穴 建物	① 33.0	口縁部1/3	観察は不明。 粘土は砂粒をやや多く、微細な白雲母を少量含む。 焼成は良好。色調は内外面とも黄褐色。	
2	第8図 図版6	甕	1号竈穴 建物	—	口縁部片	観察は外面コナテ、内面不明。 粘土は粗砂粒を多く、微細な白雲母を少量含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに暗黄褐色～淡茶褐色。	
3	第8図	底部	1号竈穴 建物	① 6.7	底部のみ	観察は不明。 粘土は粗砂粒を多く含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに暗黄褐色～灰褐色。	
4	第8図	蓋	1号竈穴 建物	① 4.5	つまみ部 のみ	観察は不明。 粘土は粗砂粒をやや多く含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに暗黄褐色～灰褐色。	
5	第8図	器台	1号竈穴 建物	① 39.0	口縁部1/2	観察は不明。 粘土は粗砂粒を多く含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに暗茶褐色。	
6	第8図 図版6	甕	2号土坑	—	口縁部片	観察は不明。 粘土は砂粒を多く含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに暗黄褐色。	
7	第8図	甕	P 1	—	口縁部片	観察は不明。 粘土は砂粒を多く含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに暗黄褐色～黄褐色。	
8	第8図 図版6	甕	P 2	① 33.0	口縁部1/3	観察は外面コナテ、内面不明。 粘土は砂粒をやや多く含む。 焼成は良好。色調は外面暗褐色、内面暗褐色。	
9	第8図 図版6	杯身	P 3	① 12.0 ② 2.5 ③ 8.1	ほぼ存在	観察は内外面不明、底部割れあり。 粘土は粗砂粒、微細な白雲母をやや含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに黄褐色。	
10	第9図 図版6	蓋	1号竈 窟区下層	① 18.1	口縁部1/2	観察は不明。 粘土は砂粒をやや多く含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに黄褐色。	
11	第9図	蓋	1号竈 窟区下層	—	口縁部片	観察は外面不明、内面コナテ。 粘土は砂粒をやや多く含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに淡緑灰色。	
12	第9図 図版6	蓋	1号竈 窟区下層	—	口縁部片	観察は内外面ともにコナテ。 粘土は粗砂粒・赤色粒を少量含む。 焼成は良好。色調は外面黄褐色、内面黄褐色。	
13	第9図 図版6	蓋	1号竈 窟区下層	—	口縁部片	観察は外面不明、内面形不明。 粘土は砂粒・雲母を多く含む。 焼成は良好。色調は外面暗褐色、内面暗褐色。	
14	第9図	蓋	1号竈 窟区下層	—	口縁部片	観察は外面不明、内面コナテ。 粘土は粗砂粒・雲母を少量含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに淡緑褐色。	
15	第9図	蓋	1号竈 窟区上層	—	口縁部片	観察は外面不明、内面コナテ。 粘土は砂粒・赤色粒をやや多く、雲母を少量含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに淡緑褐色。	
16	第9図 図版6	蓋	1号竈 窟区下層	① 18.0	口縁部1/3	観察は不明。 粘土は砂粒・赤色粒・雲母を少量含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに暗褐色。	
17	第9図 図版6	小甕	1号竈 窟区下層	① 38.8 ② 9.7	口縁部片 器口～ 底部まで 存在	観察は内外面ともにコナテ。指輪、口縁部コナテ。 粘土は砂粒をやや多く、微細な白雲母を少量含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに暗黄褐色。	
18	第9図 図版6	甕	1号竈 窟区下層	① 38.8	口縁部1/3	観察は不明。 粘土は砂粒を少量含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに暗褐色。	
19	第9図	甕	1号竈 窟区上層	—	口縁部片	粘土は砂粒をやや多く、赤色粒を少量含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに淡緑褐色。	
20	第9図	甕	1号竈 窟区下層	—	口縁部片	観察は不明。 粘土は粗砂粒を多く含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに黄褐色～黄褐色。	
21	第9図	甕	1号竈 窟区下層	—	口縁部片	観察は外面コナテ、内面不明。 粘土は砂粒・雲母を少量含む。 焼成は良好。色調は外面暗褐色～赤色、内面暗褐色。	片断あり
22	第9図	甕	1号竈 窟区下層	—	口縁部片	観察は外面コナテ、内面不明。 粘土は砂粒を含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに暗褐色。	
23	第9図	甕	1号竈 窟区下層	—	口縁部片	観察は外面コナテ、内面不明。 粘土は砂粒をやや多く含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに淡黄褐色。	
24	第9図 図版6	甕	1号竈 1区上層	① 37.0	口縁部1/3	観察は外面コナテ、内面不明。 粘土は砂粒を含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに暗褐色～灰褐色。	
25	第9図	甕	1号竈 窟区上層	—	口縁部片	観察は内外面ともにコナテ。 粘土は砂粒をやや多く、赤色粒・雲母を少量含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに淡緑褐色。	
26	第9図	甕	1号竈 窟区下層	—	口縁部片	観察は不明。 粘土は砂粒を多く含む。 焼成は良好。色調は外面暗褐色～黄褐色、内面暗褐色～灰褐色。	
27	第9図 図版6	甕	1号竈 窟区下層	—	口縁部片	観察は不明。 粘土は粗砂粒を少量、角閃石を含む。 焼成は良好。色調は外面暗褐色、内面暗褐色。	
28	第9図	甕	1号竈 窟区上層	—	口縁部片	観察は不明。 粘土は砂粒を多く含む。 焼成は良好。色調は内外面黄褐色、内面暗褐色。	
29	第9図 図版6	甕	1号竈 窟区下層	—	口縁部片	粘土は砂粒を多く、赤色粒を含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに暗褐色。	

番号	標記 図版	種別	出土位置	法量 (cm) ①縦径 ②底径	残存 状態	調整及び特徴	備考
30	第9図 図版7	甕	1号溝 Ⅱ区下層	—	口縁部片	調整は外面不明、内面ナツ。 粘土は砂粒を少量含む。 焼成は良好。色調は外面洗橙色、内面洗橙色。	
31	第9図 図版7	甕	1号溝 Ⅱ区下層	—	口縁部片	調整は外面ヨコナツテ、内面ヨコナツテ、ナツ。 粘土は砂粒・赤色粒を多く含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに洗橙色。	
32	第9図 図版7	甕	1号溝 Ⅱ区下層	—	口縁部片	調整は外面不明、内面ナツテ 粘土は砂粒を含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに洗橙色。	
33	第9図 図版6	甕	1号溝 Ⅱ区下層	—	口縁部片	調整は外面ヨコナツテ内面不明。 粘土は砂粒をやや多く、赤色粒・雲母を少量含む。 焼成は不良。色調は内外面ともにぶい黄橙色。	
34	第9図 図版6	甕	1号溝 Ⅱ区下層	—	口縁部片	調整は不明。 粘土は砂粒を多く、赤色粒・雲母を少量含む。 焼成は不良。色調は外面明褐色、内面にぶい褐色。	
35	第9図 図版7	甕	1号溝 Ⅱ区下層	—	口縁部片	調整は不明。 粘土は砂粒を少量含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに洗橙色。	
36	第10図 図版6	甕部	1号溝 Ⅱ区下層	① (11.2)	底部 1/3	調整は外面不明、内面洗橙色。 粘土は砂粒をやや多く含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに明褐色。	
37	第10図 図版6	甕部	1号溝 Ⅱ区下層	① (8.4)	底部 1/3	調整は不明。 粘土は砂粒を少量、赤色粒を含む。 焼成は良好。色調は内外面ともにぶい黄橙色。	
38	第10図 図版6	甕部	1号溝 Ⅱ区下層	① (7.4)	底部 1/2	調整は不明。 粘土は粗砂粒をやや多く、赤色粒を含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに洗橙色。	
39	第10図 図版7	甕部	1号溝 Ⅱ区下層	① (8.6)	底部 1/2	調整は外面不明、内面洗橙色。 粘土は砂粒・赤色粒を含む。 焼成は良好。色調は外面洗橙色、内面黄灰色～灰色。	
40	第10図 図版7	甕部	1号溝 Ⅱ区上層	① (8.7)	底部 1/2	調整は外面ハツ目・ナツテ、内面不明。 粘土は砂粒を多く含む。 焼成は不良。色調は外面洗橙灰色、内面洗橙灰色。	
41	第10図 図版7	甕部	1号溝 Ⅱ区上層	① 8.9	底部実存	調整は外面ナツテ、内面不明。 粘土は砂粒をやや多く、赤色粒・雲母を少量含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに洗橙色～灰色。	
42	第10図 図版7	甕部	1号溝 Ⅱ区上層	① (7.6)	底部 1/2	調整は外面不明、内面ナツテ 粘土は砂粒・細砂粒・赤色粒を少量含む。 焼成は良好。色調は外面洗橙色～灰色、内面洗橙色。	
43	第10図 図版7	甕部	1号溝 Ⅱ区下層	① (8.9)	底部 2/3	調整は外面ナツテ、内面不明。 粘土は砂粒をやや多く、雲母を含む。 焼成は良好。色調は外面洗橙色、内面洗橙色。	
44	第10図 図版7	甕部	1号溝 Ⅱ区下層	① (7.2)	底部 1/2	調整は不明。 粘土は粗砂粒・赤色粒を少量含む。 焼成は良好。色調は外面洗橙灰色、内面明褐色。	
45	第10図 図版7	甕部	1号溝 Ⅱ区下層	① 7.6	底部実存	調整は不明。 粘土は砂粒・赤色粒を少量、雲母を含む。 焼成は良好。色調は外面洗橙色～洗橙褐色、内面に灰色～灰色。	
46	第10図 図版7	甕部	1号溝 Ⅱ区下層	① 7.6	底部実存	調整は外面不明、内面ナツテ 粘土は砂粒を多く、雲母を少量含む。 焼成は良好。色調は外面洗橙色～洗橙褐色、内面明褐色。	
47	第10図 図版7	甕部	1号溝 Ⅰ区上層	① 8.1	底部実存	調整は内外面ともに不明、底部ナツテ。 粘土は砂粒をやや多く、白色粒を少量含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに軽褐色、内面洗橙色。	
48	第10図 図版7	甕部	1号溝 Ⅰ区下層	① 4.4	底部実存	調整は外面ナツテ、内面不明。 粘土は細砂粒をやや多く含む。 焼成は良好。色調は外面洗橙色、内面洗橙色。	
49	第10図 図版7	甕部	1号溝 Ⅱ区上層	① 5.5	底部 ほぼ実存	調整は不明。 粘土は砂粒・赤色粒・雲母を少量含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに洗橙色。	
50	第10図 図版7	甕部	1号溝 Ⅱ区下層	① (8.6)	底部 3/4	調整は不明。 粘土は砂粒を多く含む。 焼成は良好。色調は外面明褐色、内面洗橙色。	
51	第10図 図版7	甕部	1号溝 Ⅱ区下層	① 6.8	底部実存	調整は不明。 粘土は砂粒を多く含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに洗橙色。	
52	第10図 図版7	甕部	1号溝 Ⅰ区上層	① 6.7	底部実存	調整は外面ナツテ、内面洗橙色。 粘土は砂粒をやや多く含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに洗橙色。	
53	第10図 図版7	甕部	1号溝 Ⅱ区下層	① (34.0)	口縁部 1/5	調整は内外面ともにナツテ口縁部ヨコナツテ。 粘土は砂粒を少量、雲母をやや多く含む。 焼成は良好。色調は外面洗橙色、内面洗橙色。	
54	第10図 図版7	鉢	1号溝 Ⅱ区上層	① (17.1) ② 10.0 ③ (2.8)	全体 1/5	調整は不明。 粘土は砂粒を少量、黒鉄心白雲母を多く含む。 焼成は良好。色調は外面洗橙色～黄灰色、内面洗橙色。	
55	第10図 図版7	鉢	1号溝 Ⅰ区下層	① (19.8) ② 11.6 ③ (9.2)	口縁部+ 底部 1/6	調整は外面不明、内面洗橙褐色・ナツテ・上具ナツテ。 粘土は砂粒をやや多く含む。 焼成は良好。色調は外面洗橙褐色～灰色、内面洗橙褐色。	
56	第10図 図版7	土師 器	1号溝 Ⅱ区下層	① 3.6 ② 2.1	ほぼ完整	調整は外面ナツテ、内面ナツテ、指筒。 粘土は砂粒を少量含む。 焼成は良好。色調は内外面ともに明褐色。	
57	第10図 図版7	甕	1号溝 Ⅱ区下層	① (20.4)	口縁部+ 底部 1/2	調整は外面ヨコナツテ・底状、内面ヨコナツテ。 粘土は砂粒を含むが軽微。 焼成は良好。色調は内外面ともに洗橙色。	
58	第10図 図版7	甕	1号溝 Ⅰ区上層	① (16.6)	下半部 2/3	調整は外面ヨコナツテ外表面は洗橙ナツテ、内面ヨコナツテ。 粘土は細砂粒をやや多く含むが軽微。焼成は良好。 色調は外面洗橙灰色、内面灰色～洗橙色。	



第11図 鉄器等実測図 (1/2)

大幅2.15 cm、厚さ1.4 cm、重さ7.9 g。4は大きな気孔を持つ資料で、特に裏面には大きなものがある。最大長2.17 cm、最大幅2.1 cm、厚さ1.35 cm、重さ7.7 g。5にも大小の気孔がある。最大長2.25 cm、最大幅2.15 cm、厚さ1.1 cm、重さ7.9 g。6は気孔があり、下端が突出する形状をなす。最大長2.5 cm、最大幅2.1 cm、厚さ1.65 cm、重さ10.0 g。

### (3) 石器 (図版8～9、第12～13図)

平若C遺跡3次調査では、図化できる石器が15点出土した。その内訳は石鏃2点、石剣2点、石庖丁3点、石斧3点、砥石5点である。その殆どは1号溝から出土するが、4は1号竪穴建物跡、6はP4から出土した。

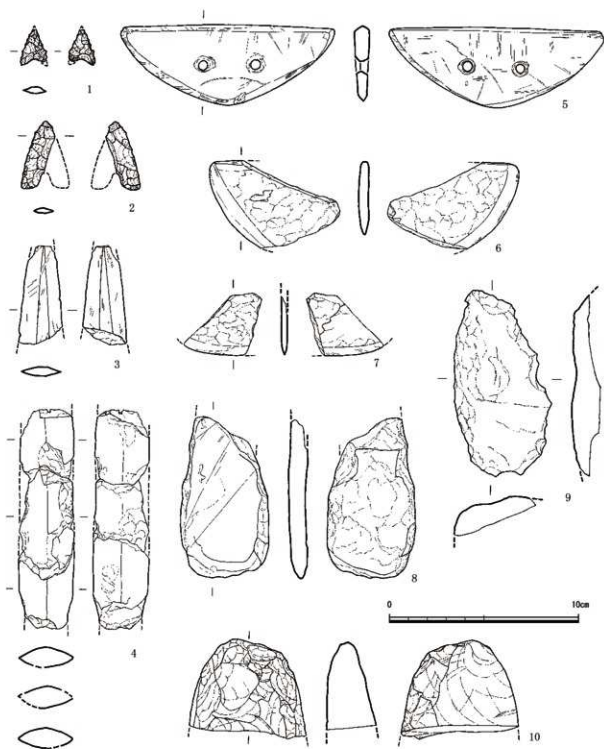
1・2は石鏃。1は凹基鏃で、鋒と右脚端部を欠損する。安山岩製である。2は鎌形鏃に近い大きな脚部を持ち、一方の脚部が欠損する。剥離は両面から施されるが粗い。安山岩製。

3・4は磨製石剣。3は鋒下の破片で、両面とも鏃を2つ持つため断面形は扁平な六角形である。凝灰岩製。4は剣身の下部で、下端部は両側辺が抉れるため茎と考えた。断面形は丸みを持ち、厚い。赤紫色の凝灰岩製。

5～7は石庖丁。5は完形品である。穿孔が刃部に近い位置にあるため、かなり研ぎ減りすることが分かる。赤紫色の凝灰岩製。6・7は砂岩製の破片資料。器面は風化により薄く剥離する。

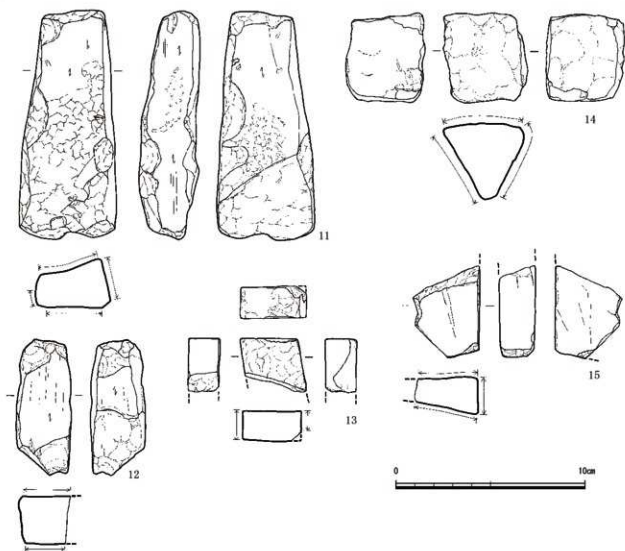
8～10は石斧。8は緑色片岩製で、刃部幅に対し、基部側は幅を減じ厚みは薄い。刃部は磨かれるが、側縁などに剥離が見られるため、扁平打製石斧に近い。9は玄武岩製の石斧片で、打割痕をよく残す。10も玄武岩製で基部の破片。表面は剥離を残し、側面は敲打痕がある。

11～15は砥石。11は表面、裏面と側面を砥面とするが、敲打痕などが残る。硬質砂岩製。12は泥岩の可能性ある。表裏に使用が確認できるが、破損部が多い。13は砂岩製の砥石で、上面と両側面を使用し、表面と裏面は比較的平滑ではあるが、未使用。14は断面形が三角形に近い形状をなす。



第12図 石器実測図① (1/2)

3面が使用されたと考えた。花崗岩製と考えられる。15は表面、裏面と残存する一側面を使用する。断面形からかなり使用されたことが観察できる。

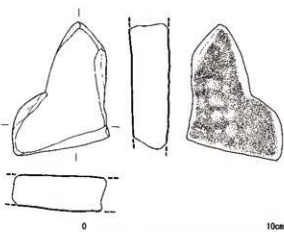


第13図 石器実測図② (1/2)

(4) 瓦 (第14図)

1号溝の上層から出土した。

古瓦の小片で、全体的に摩滅するため凸面に僅かに格子タタキ目が残存するが、他は不明。厚みは2cm程度である。暗黄灰色で、焼成は不良。胎土は細砂粒を僅かに含むが精良である。



第14図 瓦実測図 (1/2)

表2 出土石器観察表

単位は断面の厚み

番号	検出 図版	種別	出土位置	法量				石材	備考
				長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)		
1	第12図 図版 8	石鏃	1号溝	1.9	1.45	0.4	0.7	安山岩	鋒部・右側端部欠損
2	第12図 図版 8	石鏃	1号溝	3.6	1.78	0.27	1.8	安山岩	鋒部2/3程度
3	第12図 図版 8	石剣	1号溝	5.2	2.3	0.3	7.1	凝灰岩	鋒先下
4	第12図 図版 8	石剣	1号壙穴建物跡 P-4	11.5	2.9	1.25	47.5	赤紫色の凝灰岩	斬身～基部片
5	第12図 図版 8	石包丁	1号溝	4.25	11.35	0.85	30.7	赤紫色の凝灰岩	完形
6	第12図 図版 8	石包丁	P-4	4.6	6.9	0.55	24.2	砂岩	小片
7	第12図 図版 8	石包丁	1号溝	3.3	4.1	0.35	6.1	砂岩	小片
8	第12図 図版 8	石斧	1号溝	8.5	4.7	1.05	65.0	緑色片岩	小片
9	第12図 図版 8	石斧	1号溝	9.8	5.2	1.5	84.0	玄武岩	小片
10	第12図 図版 8	石斧	1号溝	5.2	6.2	2.65	104.8	玄武岩	小片
11	第13図 図版 9	砥石	1号溝	12.0	5.2	2.6	265.3	砂岩(硬質)	
12	第13図 図版 9	砥石	1号溝	7.2	3.0	2.55	90.0	鹿角?	
13	第13図 図版 9	砥石	1号溝	2.8	3.55	1.6	24.0	砂岩	
14	第13図 図版 9	砥石?	1号溝	4.7	4.3	4.65	82.6	花崗岩?	
15	第13図 図版 9	砥石	1号溝	4.85	3.55	1.95	38.2	砂岩	

## IV まとめ

平若C遺跡は春日丘陵の小丘陵に所在する遺跡である。春日丘陵上及び周辺には、奴国最大級の集落である須玖遺跡群が確認されており、平若C遺跡もその中に含まれる。未報告のために詳細は不明だが、平成3年に調査した1・2次調査の概要を記す<sup>(1)</sup>。

1次調査は、弥生時代と考えられる堅穴建物跡が19軒(円形5軒、方形等14軒)、古墳時代の堅穴建物跡が4軒、他にも土坑や溝を確認した。弥生時代の堅穴建物跡の中には、青銅器工房の可能性のある屋外溝が付設する建物が含まれる。2次調査は、1次調査の南に接する位置関係にある。弥生時代の堅穴建物跡3軒、古墳時代の堅穴建物跡3軒、土坑や溝が調査され、溝の中には大溝も含まれる。特に調査区東部には、平面形が「D」字形を呈し、屋外溝が付設する堅穴建物跡が検出され、銅戈銚型や鉄斧、鉄鎚などの鉄器、作業台と考えられる円礫が2つと大量の焼土が出土した。このため青銅器工房の可能性が考えられる。

以上のように、平若C遺跡1・2次調査は、弥生時代と古墳時代を主体とする集落遺跡であり、弥生時代には青銅器を生産したと考えられる。

3次調査地は、1・2次調査地の南側に隣接する。すでに述べたように、堅穴建物跡1軒、土坑4基、

溝6条、ピットを検出した。削平を受けるため図化できる土器が出土していない遺構が多いが、土器小片や埋土の色調、質感から弥生時代の遺構が主体を占めると考えられる。ただし、須恵器や土師器なども出土するため、古墳時代や歴史時代の遺構が少なからず存在する。

今回の調査で特筆されるのは、調査区の約半分を占める1号溝である。1号溝は、調査区の中央に検出した大溝で、丘陵の地形に沿って走る。調査の内容で記したように、南東部が狭く断面「V」字形であるのに対し、北西側に行くに従い幅が広くなり断面逆台形へと変化する。これらのことから調査区の南東側で当溝は切れていると考えられ、そこから掘削が始められたか、陸橋部が存在する可能性がある。当溝の時期について述べたい。上層には5世紀代の須恵器や鉄滓、歴史時代の瓦が出土するが、これらは調査区北側の丘陵上方からの流れ込みと考えられる。出土遺物の多くは弥生土器であるが摩滅が著しく、遺構の大きさに比して出土量は少ない。最下層や下層は中期前半～中頃の土器が多いが、後期初頭や終末期の土器も含まれる。また、下層からは鋳造鉄斧の再加工作品なども出土する。これらのことから当溝は弥生時代に掘削されたことは間違いなく、土層観察では明瞭な掘り直しは確認していないが、弥生時代中期前半頃に掘削され、終末期まで掘り直しが行われたと考えたい。

なお、当溝の調査区外、北西側には2次調査の大溝がある。恐らくは、同一の溝と考えられる。これら大溝の丘陵の上部には、弥生時代の堅穴建物跡が確認されており、規模や丘陵の等高線と平行して掘削されていることから、集落に伴う環濠と考えられる。

須玖遺跡群では、西外縁部の遺跡である赤井手遺跡、竹ヶ本A遺跡では集落の西側だけに、南外縁部の大南A遺跡、高辻D・F遺跡、高辻E遺跡では集落の南側だけに大溝が確認された。これらのことから大溝は、各集落が立地する小丘陵を巡るのではなく、谷を越えて須玖遺跡群の広い範囲を取り囲んでいたと推察される<sup>2)</sup>。

平若C遺跡は須玖遺跡群の中央部に位置する遺跡である。同様の遺跡は時期の再考が必要だが竹ヶ本C遺跡<sup>3)</sup>にもあり、さらに増える可能性がある。今後、赤井手遺跡、大南A遺跡で確認された大溝と平若C遺跡などの大溝との比較検討が必要であろう。

1号堅穴建物跡は、削平や調査区外に延び、土器も少ないため詳細は分からないが、中期末頃の建物跡と考えられる。当建物跡は上述した1号溝の南側、集落の外側に位置し、丘陵の斜面に立地するため、通常の堅穴建物ではない可能性が考えられよう。

最後に、4号土坑について記したい。土器が殆ど出ないため時期を検討し難いが、土器の小片や埋土から考えて弥生時代と判断してよからう。大型のピットにスロープが付く形態で、同様な遺構が周辺にないため、掘立柱建物跡の柱穴とは考えられない。大きさは違うが、同様の遺構に大柱遺構がある。大柱遺構は墓地の祭祀に関連する遺構と考えられており、春日市でも同じ須玖遺跡群の須玖岡本遺跡、立石遺跡や、市西部の門田遺跡辻畑地区でも確認された。しかしながら、平若C遺跡では墓地は見つかっておらず、大柱遺構と比べ規模も小さい。これらのことから考えれば、4号土坑は集落での何らかの祭祀的な行為のために建てた柱（上部の構造は不明）の掘り方と考えられる。

平若C遺跡は不明な点が多いが、弥生時代の青銅器生産や須玖遺跡群の性格を検討する上でも重要

な遺跡である。今後、1・2次調査の報告や周辺地で発掘調査に期待したい。

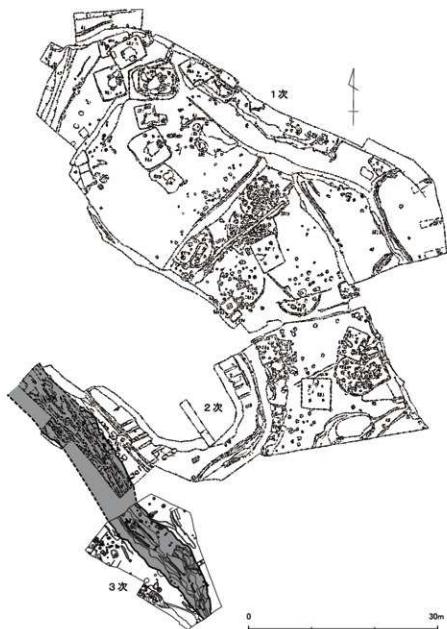
註

(1) 春日市史編さん委員会編 1995『春日市史』上

(2) 春日市教育委員会編 1994『奴国の首都須玖岡本遺跡－奴国から邪馬台国へ－』吉川弘文館

井上義也 2009「須玖遺跡群の集落構造」『第58回埋蔵文化財研究集会 弥生時代後期の社会変化 発表要旨・資料集』

(3) 境 靖紀 2006「5竹ヶ木C遺跡（2次調査）」『春日市埋蔵文化財年報13』平成16年度



第15図 平若C遺跡1・2・3次調査遺構配置図 (1/600)



圖 版



(1) 調査区東半



(2) 調査区西半



(1) 1号竖穴建物跡



(2) 1号竖穴建物跡 (南西から)



(3) 1号竖穴建物跡P 5土層 (北東から)



(1) 1～3号土坑



(2) 1号土坑断面土層 (南東から)



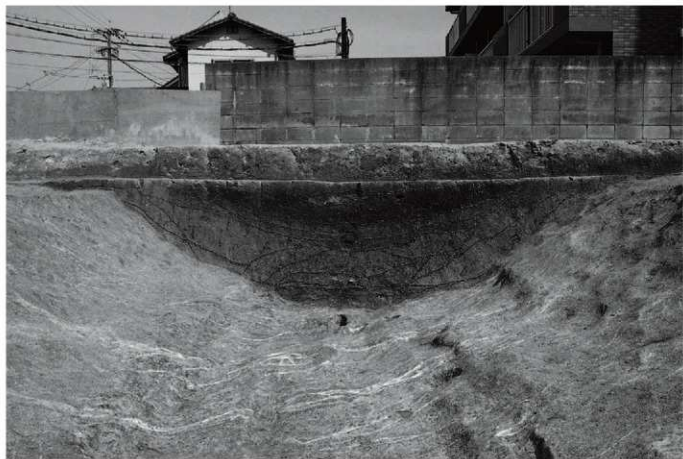
(3) 2号土坑土層 (北東から)



(4) 3号土坑土層 (南東から)



(5) P3土器出土状況 (北から)



(1) 1号溝A-A' 断面土層 (南東から)



(2) 1号溝B-B' 断面土層 (南東から)



(1) 1号溝 C-C' 断面土層  
(北西から)

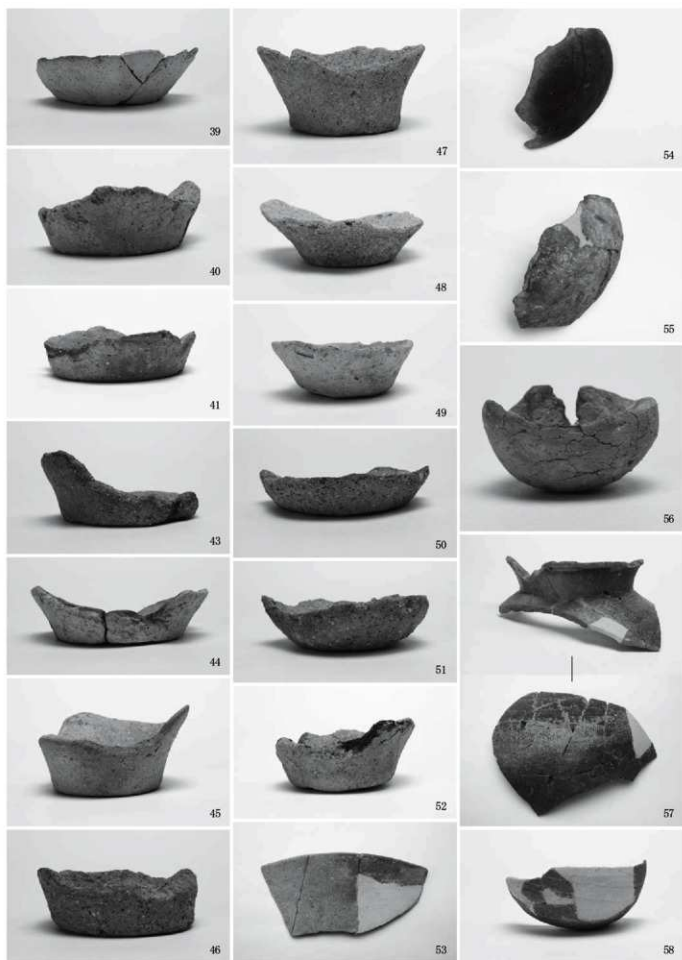


(2) 1号溝 鉄器1 出土状況  
(東から)



(3) 5号溝 D-D' 断面土層  
(南西から)

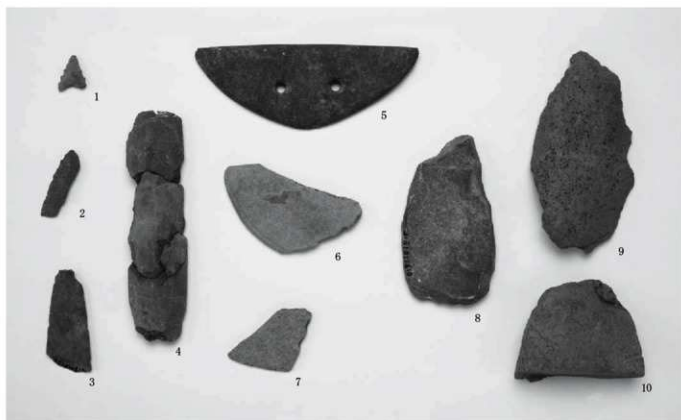




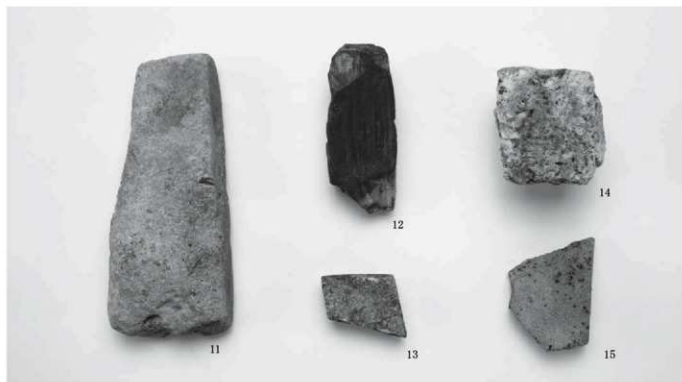




(1) 鉄器等



(2) 石器①



(1) 石器②



(2) 瓦

報告書抄録

ふりがな	へいじゃくしーいせき さんじちょうさ
書名	平若C遺跡 一3次調査一
副書名	福岡県春日市弥生所在遺跡の調査
シリーズ名	春日市文化財調査報告書
シリーズ番号	第86集
編著者名	井上義也・下田詩織
編集機関	春日市教育委員会
所在地	〒816-0804 福岡県春日市原町3丁目1番地5 TEL 092-584-1111
発行年月日	2021年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
へいじゃくしーいせき 平若C遺跡 3次調査	ふくおかけんかすがしやよい 福岡県春日市弥生	40218		33° 32' 4"	130° 27' 7"	20190415 ～ 20190704	353.0	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平若C遺跡 3次調査	集落	弥生時代 古墳時代	堅穴建物跡 1軒 土坑 4基 溝 6条	弥生土器・須恵器・ 土師器・石器・鉄 器	調査区の北西部から南東部 にかけて大溝を検出。弥生土 器、須恵器、石器、鉄器など が出土した。

要約	<p>平若C遺跡は春日丘陵の小丘陵に所在する遺跡である。春日丘陵上及び周辺には、奴国最大級の集落である須玖遺跡群が確認されており、平若C遺跡もその中に含まれる。</p> <p>1・2次調査については未報告のため詳細は不明だが、弥生時代と古墳時代を主体とする集落遺跡であり、弥生時代には青銅器を生産したと考えられている。</p> <p>3次調査は1・2次調査の南側に隣接する遺跡であり、堅穴建物跡、土坑、溝、ピットを検出した。削平を受けるため固化できるような土器が出土していない遺構が多いが、土器小片や埋土の色調、質感から弥生時代の遺構が主体を占めると考えられる。</p> <p>平若C遺跡は未だ不明な点が多いが、3次調査の主な成果としては、調査区の約半分を占める1号溝が挙げられる。1号溝は調査区の中央に検出した大溝で、丘陵の地形に沿って走っており、おそらくは北西側の2次調査区にある大溝と同一と考えられる。これらの大溝の丘陵上には弥生時代の堅穴建物跡が確認されており、規模や丘陵の等高線と平行して掘削されていることから、集落を巡る環濠と考えられる。</p>
----	---

---

# 平若C遺跡

— 3次調査 —

春日市文化財調査報告書 第86集

2021年3月31日

発行 春日市教育委員会  
福岡県春日市原町3丁目1番地5

印刷 大道印刷株式会社  
福岡県春日市日の出町6丁目23

---